

## 図書紹介

ハインリヒ・グレシュベック著 C.A. コルネリウス編 倉塚平訳  
『千年王国の惨劇 — ミュンスター再洗礼派王国目撃録 —』平凡社刊

杉山 文彦

ここで私が紹介しようとする書物は、宗教改革の嵐が吹き荒れる16世紀、西北ドイツの教会都市ミュンスターに於いて、神聖ローマ帝国の聖俗諸侯の連合軍に包囲される中、1534年から翌年にかけて一年四ヶ月にわたって出現した再洗礼派王国の目撃談である。家具職のマイスター・グレシュベックは再洗礼派とは何の関係もなかったが、たまたま故郷のミュンスターに帰ったところ再洗礼派王国運動に巻き込まれてしまい（実際には傭兵として市に雇われた？）事態の一部始終を目撃、包囲下で飢餓が迫る市を脱出して帝国軍に協力し、ミュンスター市陥落のきっかけを作った。本書は、そのグレシュベックがその間に見たことを後年になってある事情から口述筆記させたものを、19世紀ドイツの歴史学者コルネリウスが整理したものの邦訳である。本文のほかにコルネリウスの解説文、それから解説を兼ねた訳者倉塚氏の長文の「あとがき」が付いて理解の助けとなる。

ところで、私は中国研究をなりわいとする者であって西欧の宗教改革には素人である。その私が敢えてこの書物の紹介をするのは、そこに見られる出来事が時と所を異にして、中国や最近の日本でも奇妙にも似た形で見出せると思ったからである。16世紀ドイツの一都市で起った惨劇は、決して他人事ではない。よく考えれば身につまされる出来事であり、他山の石とすべき事柄なのである。

内容の紹介に入る前に、再洗礼派とは何か少し説明しておいたほうがよからう。1517年10月31日、ルターがヴィッテンベルクの教会に免罪符批判の95ヶ条を張り出したことから始まった宗教改革はドイツ始め西欧各国を激動の渦に巻き込んで行く。宗教改革者たちは、ローマ教皇を頂点としヨーロッパ中に張り巡らされたカトリック教会の権能を否定し、人は自分自身の信仰によって直接神と向き合うとした。カトリック教会という共同体主体の信仰から個人主体の信仰へと、信仰のあり方の根本的変革を主張したのである。このような運動の中から、幼児洗礼を無意味とし自覚した大人に対する洗礼を主張する再洗礼派が出てきた事は、理の当然といえる。無自覚な幼児に洗礼を施しキリスト教徒にしてしまうから教会に不信仰者が多くなり墮落が始まる。教会は自己の信仰を自覚した者のみによって構成されなければならない、と彼らは主張した。しかし、非キリスト教国に暮らす我々から見れば至極真つ当な主張に見えるこの再洗礼派は、カトリック教会のみならずプロテスタントの陣営からも排斥され弾圧されることになる。ユダヤ人のような特殊な集団を除けば、住民全体がキリスト教徒であった当時の西欧社会では、キリスト教と社会生活とは分かちがたく結びついていた。宗教が社会生活全体を覆っていたのである。このような中で再洗礼を主張することは、教会を分裂させるだけでなく、

社会的・文化的価値体系を解体させることを意味した。自覚的に信仰に入る前に死んだ幼児はどうなるのか、永遠の地獄に落ちねばならぬのか、といった切実な問題が次々と発生する。したがって、このような中で再洗礼派が社会的に影響をもてば、それは既成の社会を全面的に否定する世直し・千年王国運動の傾向を帯びざるを得ない。事実、ミュンスター市で実権を握った再洗礼派は社会体制から道徳体系まで既成のもの全てを否定し破壊して、帝国諸侯の連合軍に包囲される中、千年王国の到来を待ちつつ崩壊していった。

本書の語り手であるグレシュベックは、再洗礼派の教義にはさして関心を示していない。しかし、彼等の支配下に起った出来事については多方面にわたって詳しく語っている。彼は再洗礼派の指導者に対する反感を隠してはいないが、その語り口は冷静かつ公平であって、自分が確認できない事に関しては、「私はそれについて語ることはできない。私は見ていないから」といって言及を避け、自ら確認できる事だけについて語るという誠実な態度を全編にわたって貫いている。立場の違う者の観察からくる偏向はあるにしても、敵に包囲される中で起った千年王国運動の実態をよく伝えているといえよう。

グレシュベックの語りは、再洗礼派がミュンスター市の実権を握るに至るいきさつから、自分も一役絡んでの市の陥落までであるが、知識階層とは縁の無かったらしい家具職親方の語り口は、必ずしも時系列に沿ったものでも、またテーマ別に整理されたものでもなく、思いつくままに喋ったという感じである。しかし、その分当時の有様を生き生きと伝えているとも言える。では、どのような事が語られているのだろうか。まず、ミュンスター市内で再洗礼派の説教師があちこちで説教を始め、人々の一定の支持を集め始める。それと並行してオランダ人やフリースランド人など各地からの再洗礼派が市内に入って来て影響力を強め始める。これを嫌った市民の中には市外に一時避難をする者も出始めるが、このことが一層再洗礼派の勢力を強める結果となり、彼等が市の実権を握ってしまう。残った市民は、再洗礼派に同調するか市外に追放されるかを迫られる事になる。かくして、ミュンスター市に再洗礼派王国が誕生するが、それは同時に市が敵によって包囲されることを意味した。そのような中で、再洗礼派による世直しが始まる。再洗礼派以外は全て背信の徒とされ、背信の徒によって作られたものとして既存の全てが否定される。私有財産は否定され、食料・貴金属から生活用具・衣服に至るまで生活に必要な最低限を除く全てが公収され貨幣制度も廃止され、実生活上での絶対平等が目指される。誰でも自由に利用できるように家の戸は夜も開けておかねばならぬとされた。結婚もそれまでのものは無効とされ、新たに一夫多妻制が導入され、このため男女の仲は陰悪なものとなった。市内の教会は全て掠奪破壊され、大聖堂の中ではカトリックのミサを反転させた乱痴気騒ぎが行われた。書物は聖書以外全て焼きすてられた。その一方で、オランダ人の説教師が王となり、その周囲にさまざまな高位高官が設けられる。彼等はその位階に応じて、公収された金銀財宝を用いて華美に着飾り豪奢に暮らす。敵の包囲の中で市全体が飢餓に陥り餓死者が続出するようになって、王や高官たちは餓えなかったという。神による救いが度々預言され、今の苦しみは神による試練であると説明される。宗教的・政治的效果を狙って度々処刑が行われる。このような事々がマイスター・グレシュベックによって語られている。

過去の一切を汚辱に満ちたものとし、それを断ち切って千年王国へ清浄な神の国へと飛翔し

ようとしたはずの再洗礼派王国。しかし、グレシュベックが語るそれは憤怒と恐怖が支配する王国であった。ユートピアの建設を掲げて展開されたはずの運動が、それとは正反対の地獄を作り出してしまふ。一見奇異なことはあるが、歴史上このような例は決して珍しくはない。東アジアの近現代史にも同様な例は見出せる。

1850年代から60年代にかけて中国の長江中流域から下流域にかけてを支配した太平天国も、清帝国の体制を妖魔による支配とし、その打倒の上に理想の国を打ち立てるとした。その綱領的文書である『天朝田畝制度』によれば、地上の土地は全て神のものとされ、人々に一律平等に分け与えられ、そこで作るべき作物も指定される。収穫物は生活に必要なものだけが各自の手元に残され、その他は全て公収されて聖庫に納められることになっていた。ここでも絶対平等の清貧の生活が想定されている。その一方で『天朝田畝制度』は絶対平等な庶民の上に幾重にもなる官僚の階層制度を定めていた。清朝との絶えざる戦争状態にあったことにより、一律平等の土地制度は実行にうつすひまはなかったが、階層制度の方は実施され天王洪秀全以下幹部たちはそれぞれ華美な宮廷を営んだ。また、権力の座を巡って惨劇を繰り広げもした（小島晋治『洪秀全と太平天国』岩波現代文庫）。庶民の絶対平等と指導部の特権という構造は、ミュンスター市の再洗礼派王国の場合と全く同じである。毛沢東の指導する中国共産党の運動においても延安整風運動、大躍進運動、プロレタリア文化大革命など、絶対平等主義（平均主義）の熱狂に起因する悲劇が何度か繰り返されている。一方この共産党の運動とはまったく別に、20世紀前半の中国では各地で世直しを叫ぶ群小の「真命天子」が出現していた。彼らは絶対平等主義とともに官職に強いこだわりを持っていたという（御茶の水書房刊『ユートピアへの想像力と運動』所収の小島晋治・小林一美論文）。中国のみではない、日本でも宗教カルト「オウム真理教」が同様の性格を持っていたことは、記憶に新しいところであろう。あの奇怪な集団に於いても、資産をすべて寄進した清貧の一般信者の上に、〇〇省などと言った国家のミニチュアの様な物が乗っかり特権階層を形成していた。

キリスト教世界に繰り返し現れる千年王国を研究したイギリスのノーマン・コーンは、ヨーロッパ中世から近代初頭の一般の農民運動と千年王国運動とを明確に分けて論じている。彼によれば、同じ農民反乱でも、たとえ貧しくとも農民として生活基盤がある場合、反乱の掲げる要求は農民としての生活改善・権利拡大に繋がる具体的なもので、千年王国運動のように既存の社会を全否定するものとはならない。千年王国運動の参加者は農村共同体からはみ出してしまった者や都市の貧民など根無し草のような人々であるといっている（『千年王国の追求』江河徹訳 紀伊国屋書店）。そうであれば、千年王国運動は現代社会においてこそ容易に多くの参加者を見出す事ができるといえよう。安定よりは変化を基調とする現代社会にあっては、そこに暮らす大半の者が実は根無し草である。我々現代人は千年王国的なものに反応し易い素質を持っているのである。実際、先進国に於いては様々な宗教カルトの活動が後を絶たない。16世紀ドイツの一都市の出来事は、見方を変えれば意外に身近な存在なのである。